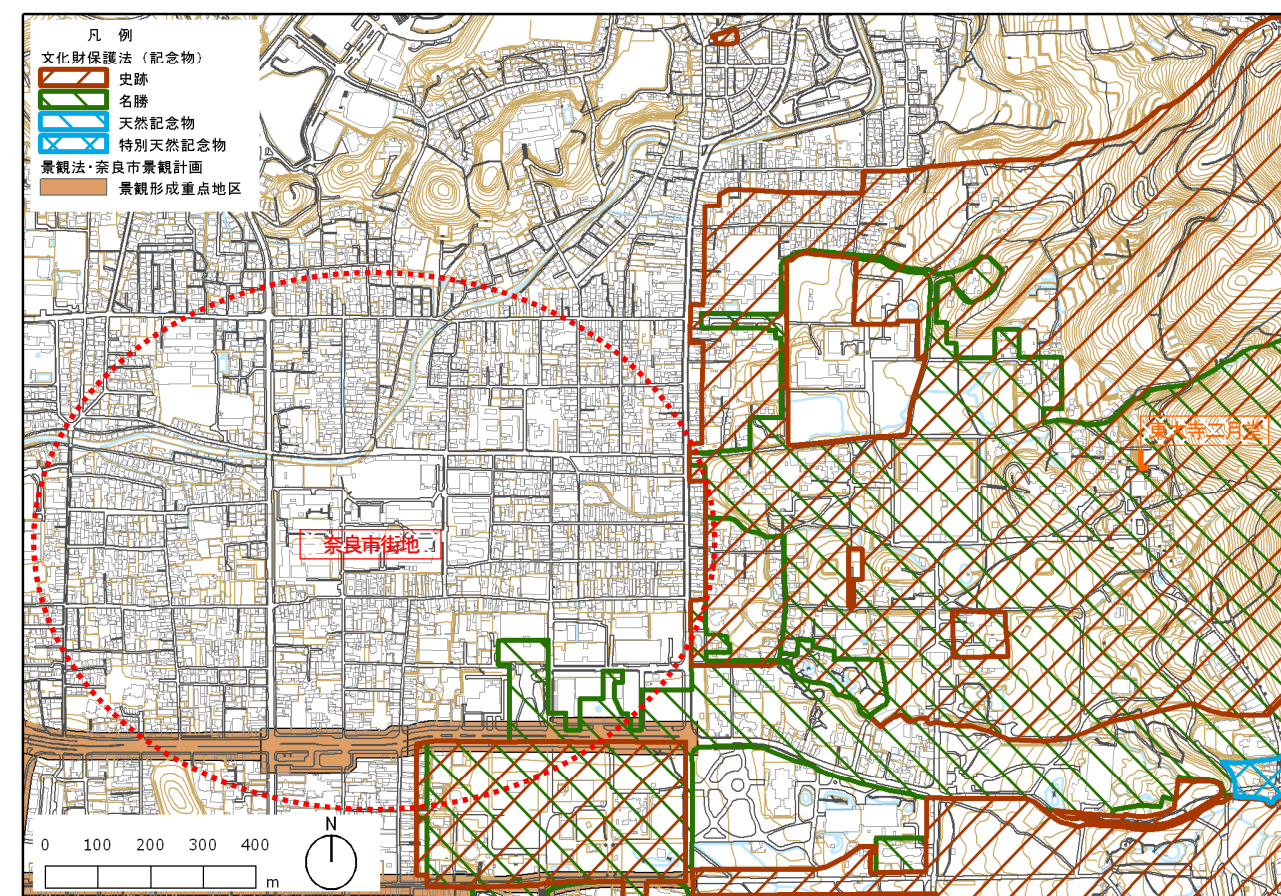
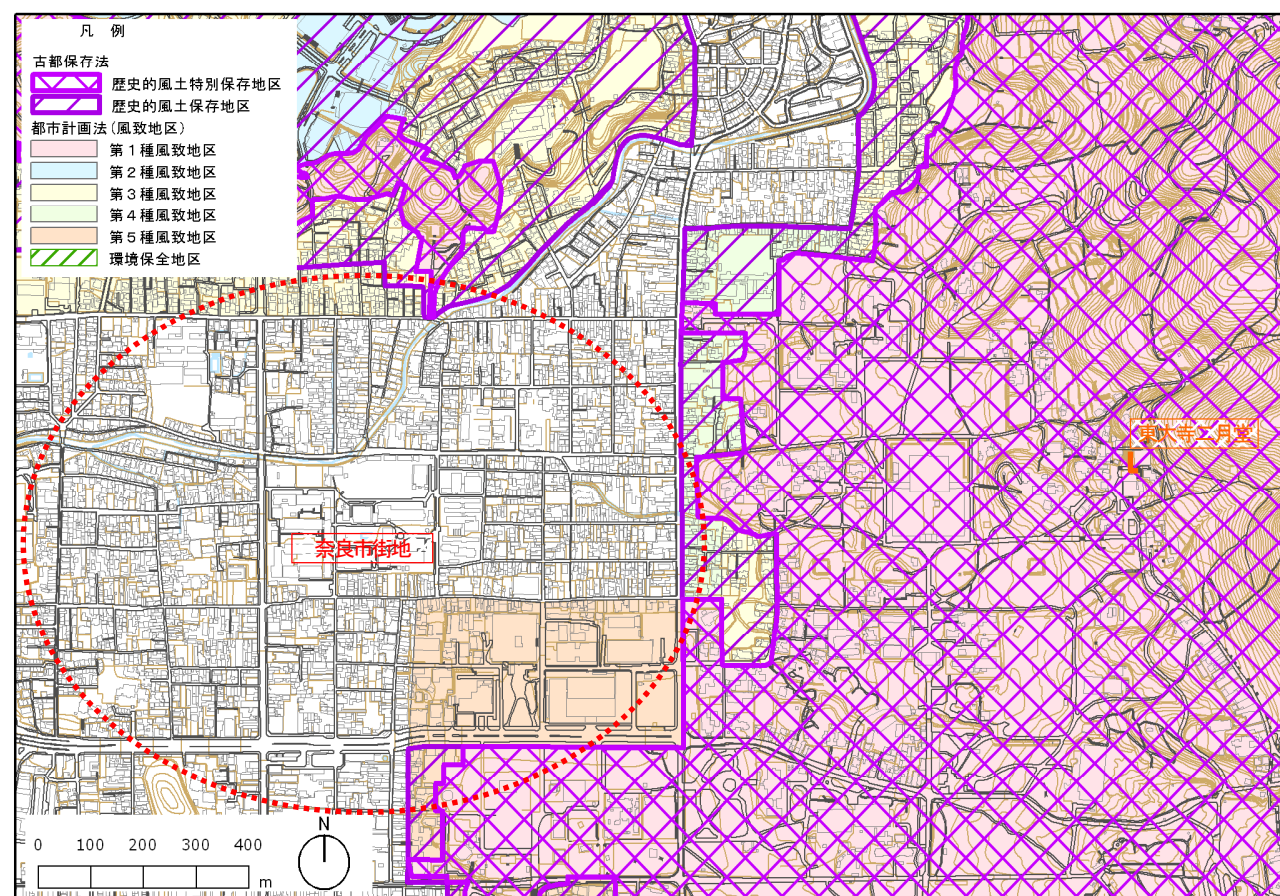
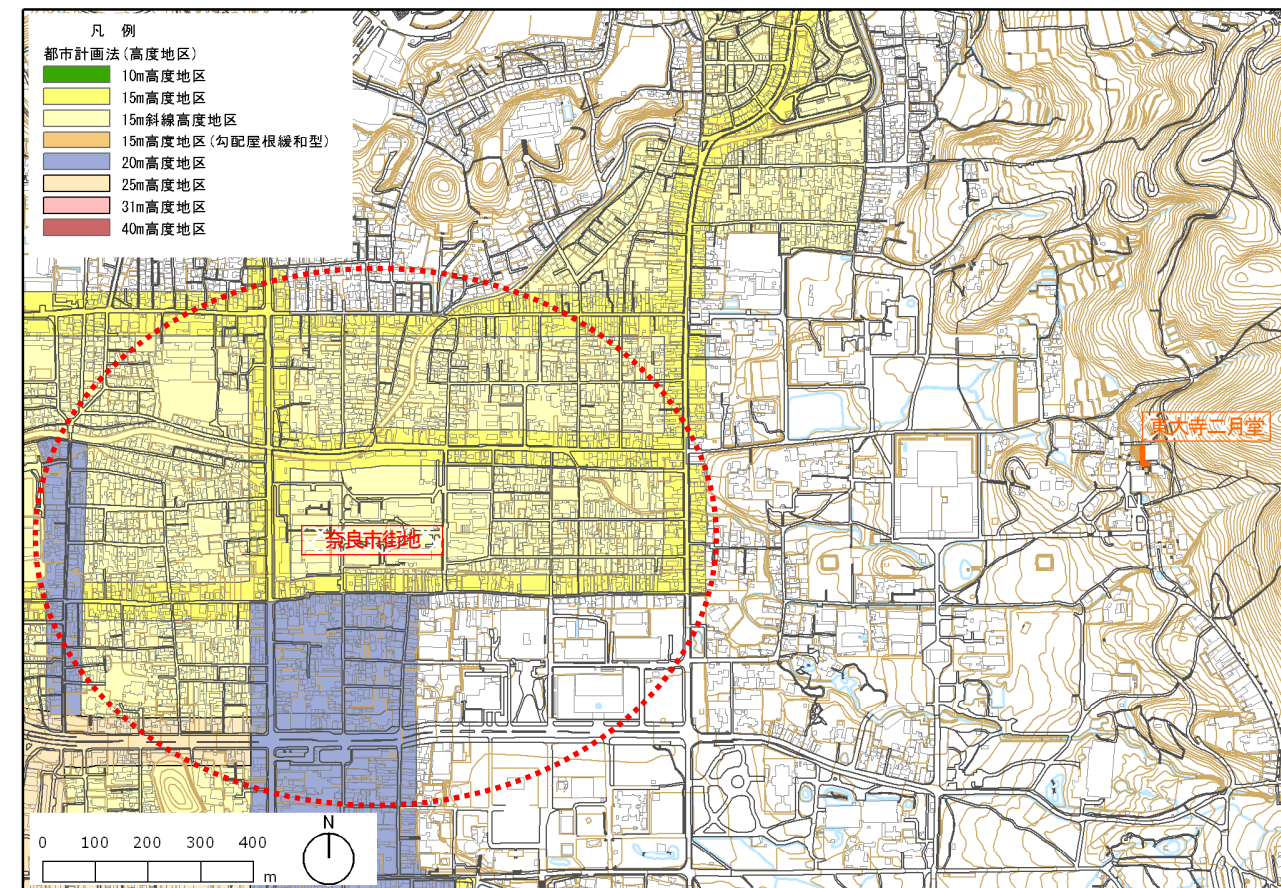
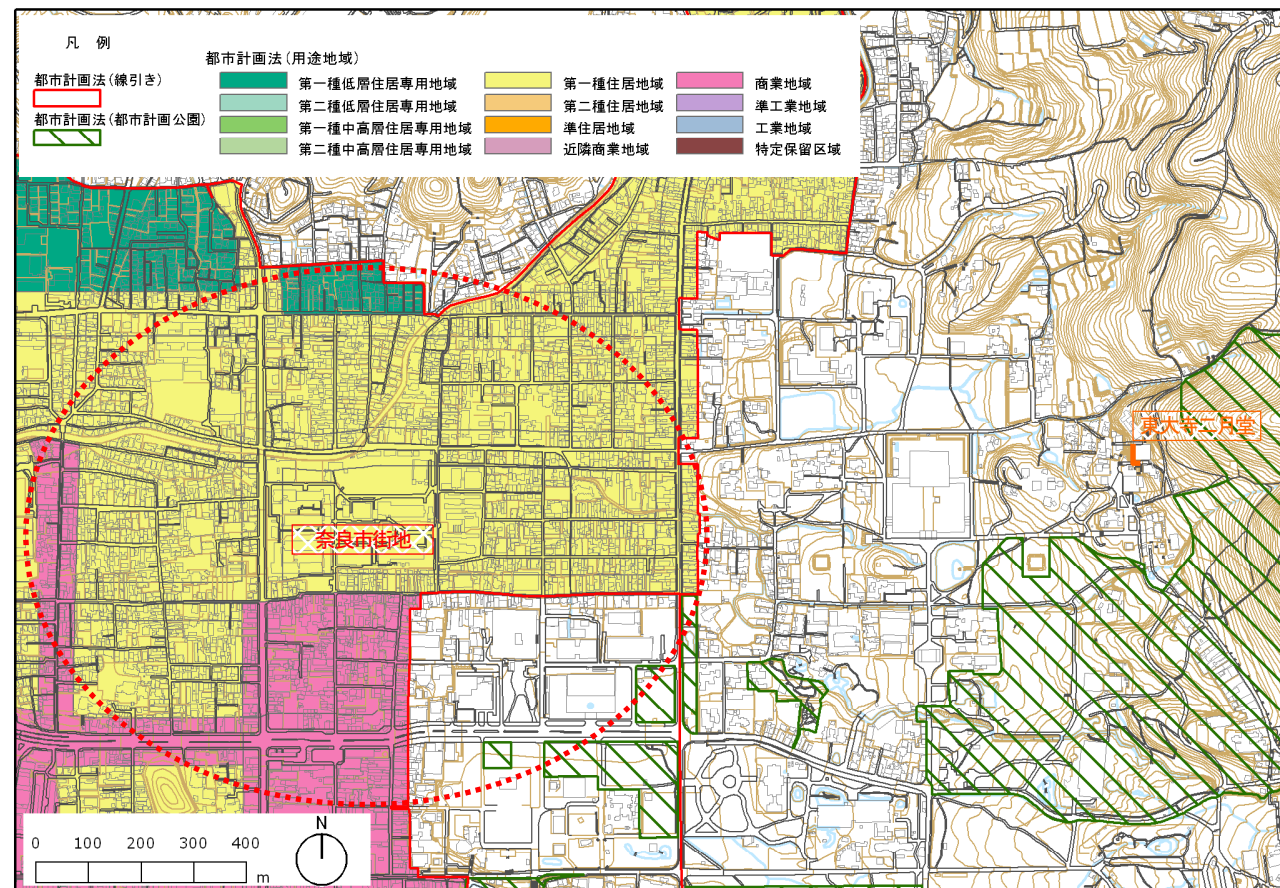
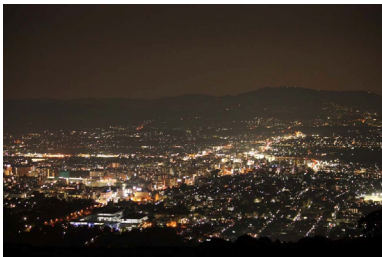


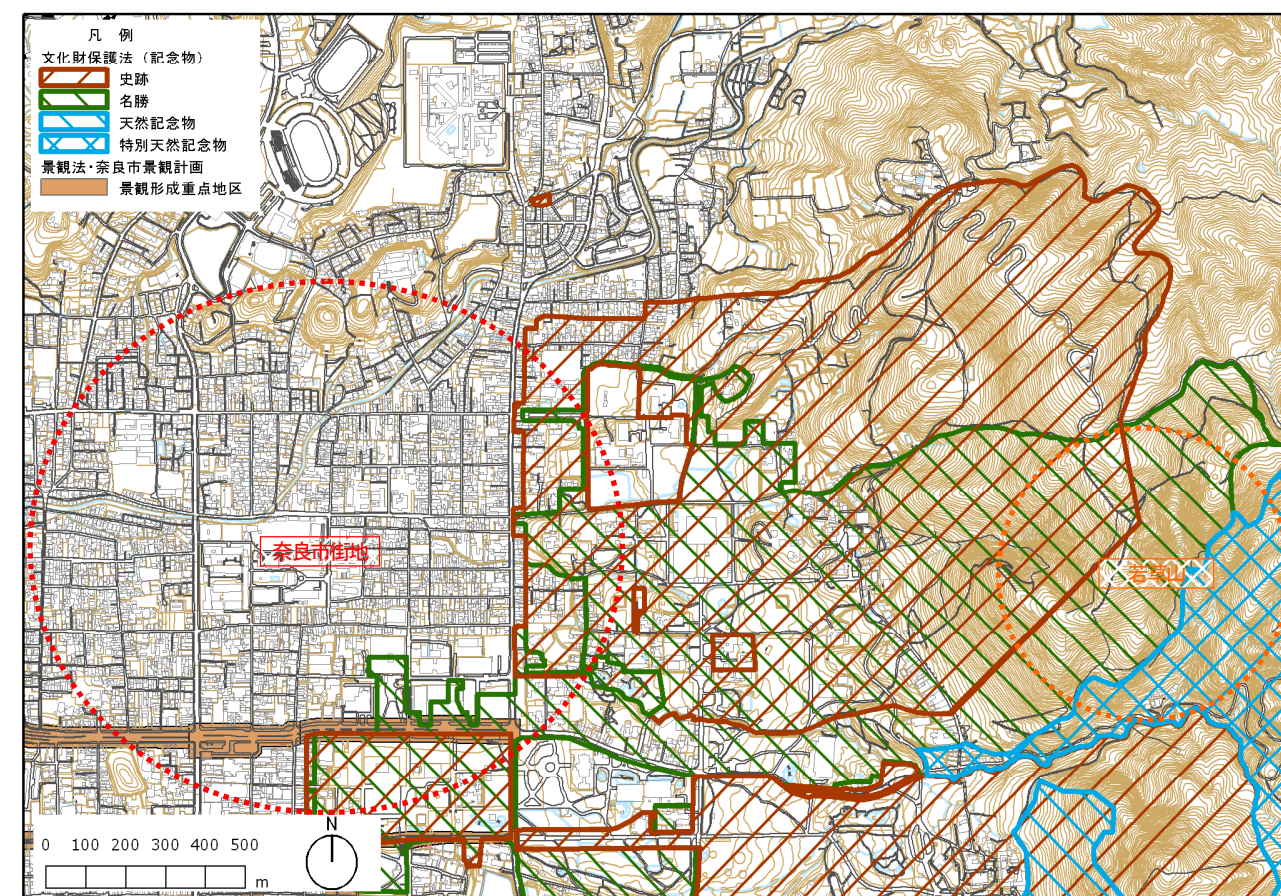
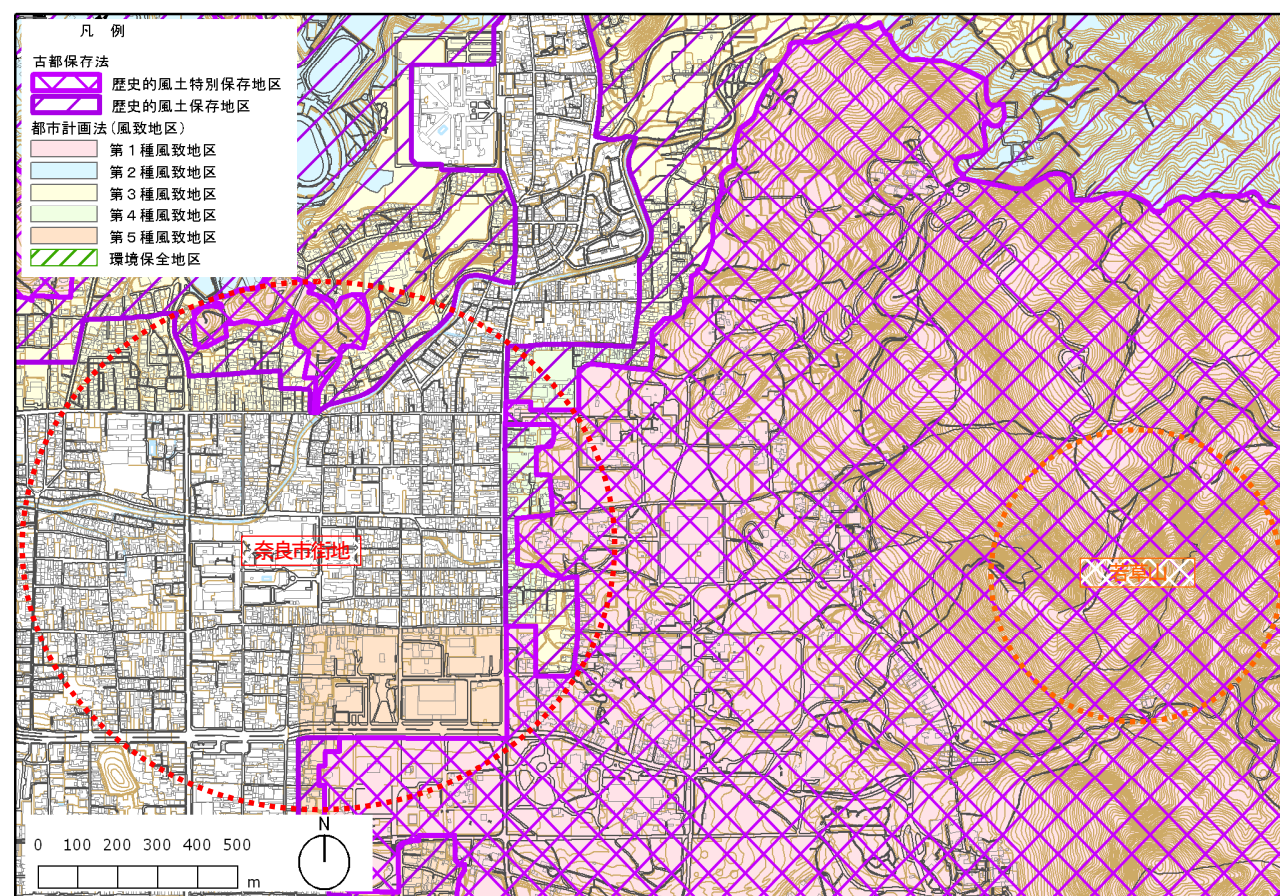
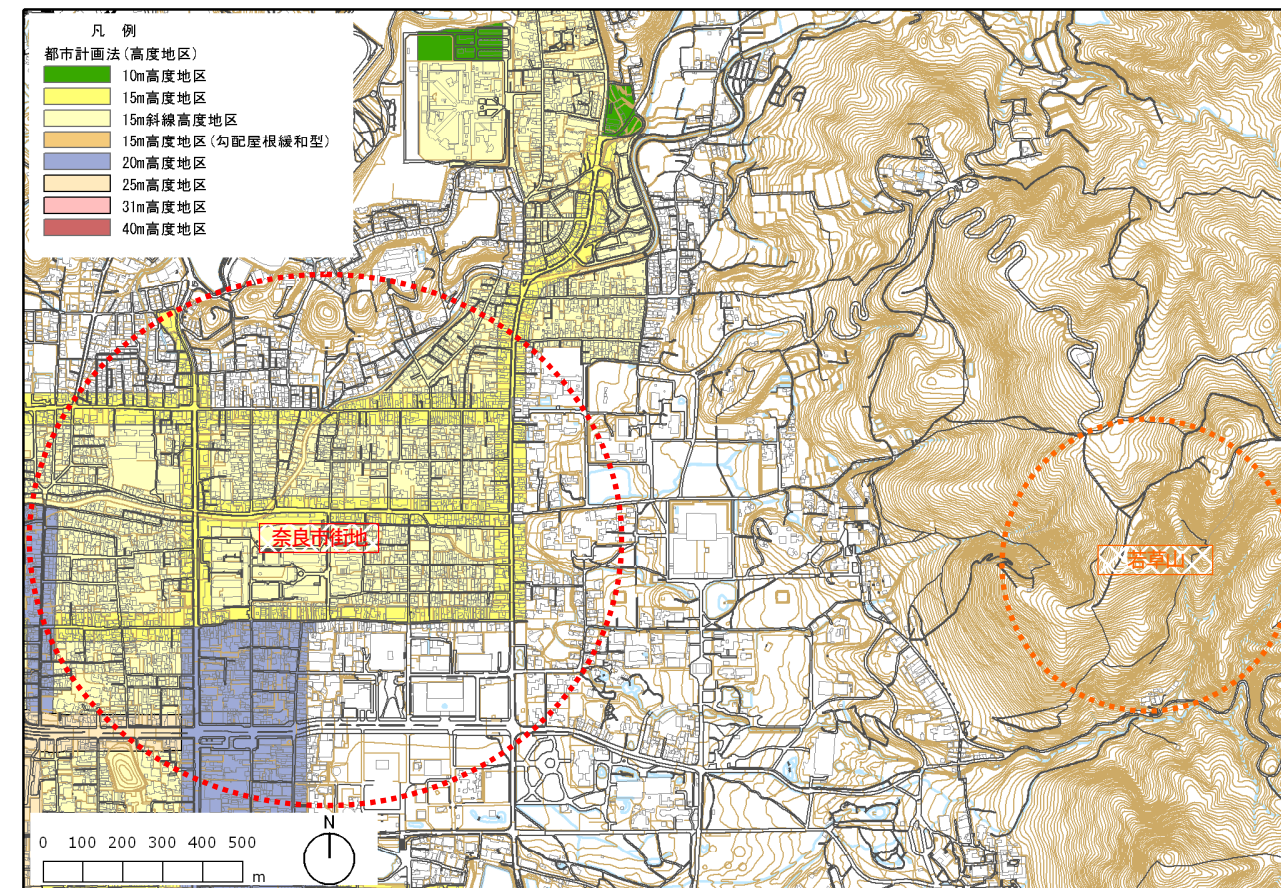
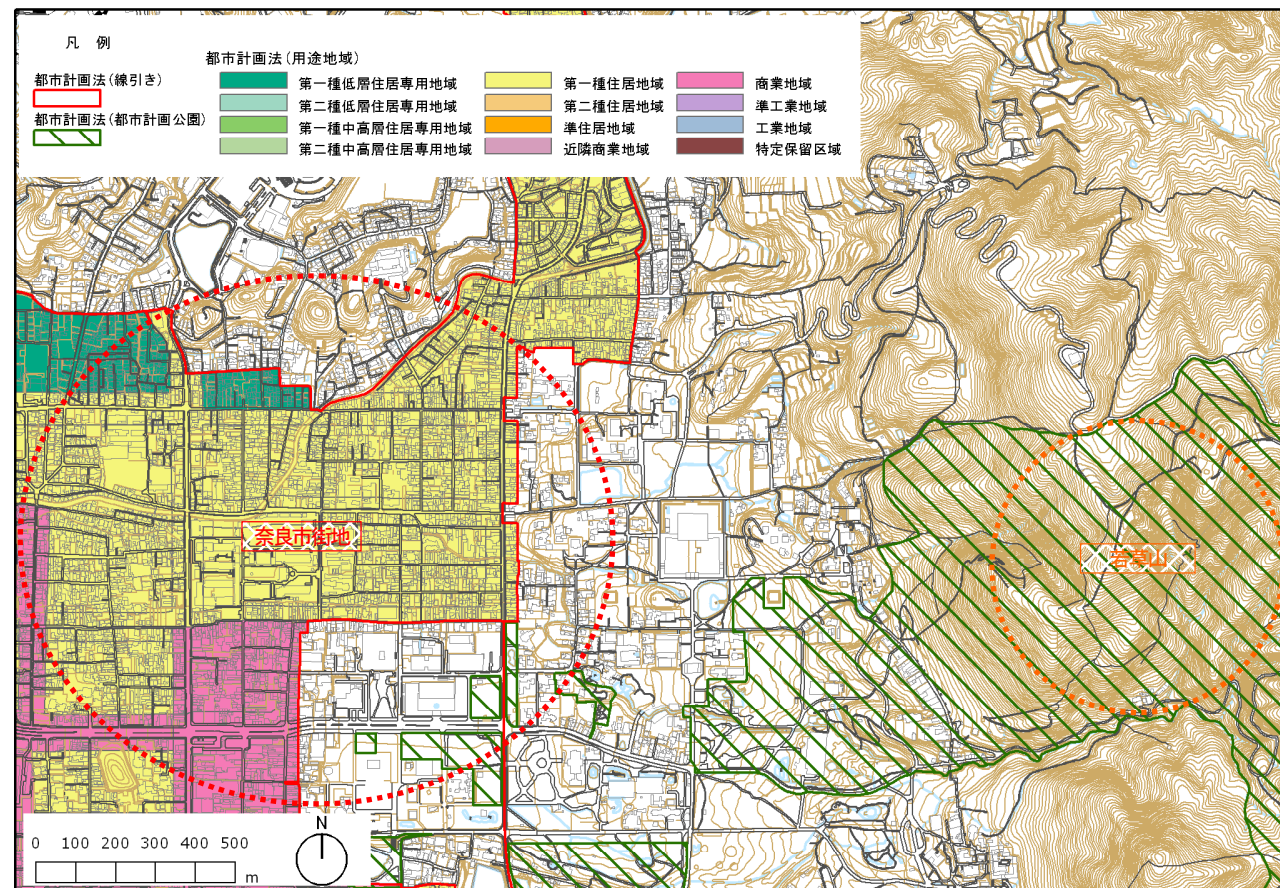
No. 4 東大寺二月堂から奈良市街地への眺望			類	型	I：見下ろし型眺望景観	
						
			視	点	場	東大寺二月堂
			視	対	象	奈良市街地
			眺 望 空 間	近	景	東大寺の堂・塔頭
				中	景	樹林
				遠	景	奈良市街地、東大寺大仏殿、生駒山系の山並み
目に見える景観の特性			視点場が高台に位置しているため、近景から遠景まで広がりのあるパノラマ景を望むことができる。 近景から中景には、東大寺の堂や院・塔頭と周囲の自然環境が一体となり、歴史的風土を創り出している。また、その遠方には、奈良市街地や山並みを望むことができる。 夕刻には、堂や院・塔頭、樹林をシルエットとなり、生駒山地に沈む美しい夕日を眺めることができる。			
心で感じる景観の特性	歴史的背景	東大寺二月堂 平重衡の兵火（1180）、三好・松永の戦い（1567）の2回の戦火には焼け残ったが、寛文7年（1667）のお水取りの最中の失火で焼失している。2年後に江戸幕府の援助を得て、従前の規模・形式を踏襲して再建されたものが現在の建物である。 奈良市街地 和銅3年（710）の平城遷都により築かれた平城京を基盤として、発展・成熟してきた。平城京は風水思想にもとづき築かれ、東西北を山々に囲まれている。				
	民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	東大寺二月堂 法会「修二会」は「お水取り」とも呼ばれており、大仏開眼供養会の行なわれた天平勝宝4年（752）に始められ、現在まで一度も途絶えることなく続けられている。 司馬遼太郎は「奈良散歩」のなかで、文化の定義を「その集団を特色づける歴史的神聖慣習」と仮定し、そのような意味では「東大寺における「文化」は修二会（お水取り）によって決定的に代表される」と記している。				
	眺望景観の構成要素の関係	東大寺二月堂と院・塔頭 奈良には院・塔頭が数多くあり、それらが様々な趣向を凝らした庭をもっている。江戸初期頃と見られる「東大寺寺中寺外惣絵図」には50を超える塔頭がみられる。東大寺二月堂から東大寺を支えた院・塔頭などの配置、甍を望む宗教文化を感じられる眺望景観である。				
情報としての景観の特性	名所案内記 絵 図 等	東大寺二月堂 「大和国細見図」（享保20年（1735））、「大和名所図会巻ノ一」（寛政3年（1791））、「いんばんや絵図」（明治3～15年（1870～1882））、「奈良名勝案内図」（大正14年（1925））など、近世以来多くの名所案内記で紹介されている。				
	インベントリー	東大寺 世界遺産として多くの人々に知られており、南都七大寺のひとつでもある。また、奈良は、「わたしの旅100選」や「日本遺産・百選」「新日本観光地百選」などに選定されており、東大寺はその多くで構成要素のひとつとしてあげられる。 東大寺二月堂からの夕日 「日本の夕陽百選」に選定されている。  東大寺二月堂夕焼け （社）奈良市観光協会『写真コンクール』入賞作品				
			守 る た め の 視 点			視対象の前景の堂や院・塔頭、樹林が広がる区域は、歴史的風土特別保存地区、第一種風致地区、名勝奈良公園、史跡東大寺旧境内等として保存が図られている。また、これらの社寺建築物の多くは、指定文化財として保存が図られている。そのため、新たな保全施策は求められないが、視対象への眺望の前景に映りこむ高さ・規模の都市公園施設の建設は行わないこと、また、都市公園施設の整備等の際は、形態・意匠等に十分に配慮することが求められる。 （施策の方向性）C-1
			整 え る た め の 視 点			北東方向には旧奈良ドリームランドの工作物が映りこむ。今後の跡地利用のあり方を含めた景観阻害要素の改善の検討が求められる。 （施策の方向性）F-1
			活 か す た め の 視 点			奈良県「まほろば眺望スポット百選」に選定されており、奈良の景観宝地図にもあげられている。また、公募により推薦された眺望景観であり、多くの人に知られているといえる。国宝及び史跡として、歴史的な風情のある良好な視点場が形成されており、現状を維持していくことを旨とし、新たな視点場整備は求められない。 （施策の方向性）—

法的 位置 付け



No. 5 若草山から奈良市街地への眺望			類	型	I：見下ろし型眺望景観		
 			視	点	場	若草山	
			視	対	象	奈良市街地	
			眺 望 空 間	近	景	若草山のノシバ、(鹿)	
				中	景	樹林、東大寺大仏殿	
				遠	景	奈良市街地、生駒山系の山並み	
目に見える景観の特性		若草山のノシバが奈良盆地への雄大なパノラマ景をつくりだす。 近景には若草山のノシバや鹿が映り、中景には山裾の樹林地や東大寺の堂や院・塔頭、遠方には奈良市街地や生駒山系の山並みを望むことができる。 夜には奈良市街地の美しい夜景を望むことができる。					
心で感じる景観の特性	歴史的背景	若草山 山容が菅笠の形をし、3つの嶺が重なったようにみえることから、通俗的に「三笠山」とも呼ばれてきた。若草山の名は「伊勢物語」で在原業平が「むさし野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」と歌ったことに由来するとも言われている。東大寺山堺四至図によると、元々は樹木の茂った山であったことがわかる。山頂には前方後円墳である史跡鶯塚古墳があり、鶯山とも呼ばれる。 奈良市街地 和銅3年(710)の平城遷都により築かれた平城京を基盤として、発展・成熟してきた。平城京は風水思想にもとづき築かれ、東西北を山々に囲まれている。					
	民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	若草山 毎年1月に、「若草山の山焼き」が行なわれる。若草山の山焼きの起源には、若草山山頂にある鶯塚古墳の鎮魂のためという説や若草山を年内もしくは翌年の1月頃までに焼かなければ不祥事が起こると考えられていたためという説、東大寺と興福寺との領地争いがもとであるという説、春の芽生えをよくするための原始的な野焼きの遺風を伝えたものであるという説などの諸説がある。 春季になると一帯では谷間に鶯の鳴く声が聞こえたことから以下の歌が歌われている。 「今もなほ 妻やこもれる 春日野の 若草山に うぐひすの鳴く」(中務卿親王「夫木抄」) 「すたつとも みゑぬものから 鶯の 山のいろいろ ふみも見ろかな」(「宇津保物語」)					
	眺望景観の構成要素の関係	若草山のノシバと鹿 近景に映るノシバと鹿について、ノシバは日本固有のシバであり、ノシバは鹿との自然のサイクルによって古来から生息し続け、近畿では若草山付近が唯一の自生地となっている。 若草山と奈良市街地・東大寺・興福寺 若草山は、諸説ある山焼きの起源から、奈良市街地と若草山の関係や東大寺・興福寺との関係を感じられる。若草山からは、奈良市街地、東大寺、興福寺を一望できる。					
	名所案内記 絵 図 等	若草山 「大和名所図会巻ノ一」(寛政3年(1791))、「奈良名所東山一覧之図」(幕末頃)、「いんばんや絵図」(明治3～15年(1870～1882))、「奈良名所細見図」(明治24年(1891))など、近世以来多くの名所案内記で紹介されている。					
情報としての景観の特性	インベントリー	若草山 若草山を含む奈良公園は、「日本の歴史公園100選」「日本の都市公園100選」に選定されている。また、若草山の山焼きは「人と自然が織りなす日本の風景百選」に選定されている。 若草山からの夜景 「新日本三大夜景」に選定されている。			 若草山からの夜景	活かすための視点	奈良県「まほろば眺望スポット百選」に選定され、奈良の景観宝地図にもあげられている。また、公募により推薦された眺望景観であり、十分に認知されているといえる。新たな視点場整備は求められないが、広大なノシバ等の広がる視点場として適切に維持・管理していくことが求められる。 (施策の方向性) —

法的位置付け



No. 6 奈良奥山ドライブウェイ（雑司町区間）から東大寺大仏殿への眺望			類	型	I：見下ろし型眺望景観	
 			視	点	場	奈良奥山ドライブウェイ（雑司町区間）
			視	対	象	東大寺大仏殿
			眺 望 空 間	近	景	山林
				中	景	東大寺大仏殿
				遠	景	奈良市街地、生駒山系の山並み
目に見える景観の特性		高所からの見下ろしの眺望であり、近景に山林、中景に東大寺大仏殿、遠景に奈良市街地と西方の生駒山系の山並みを望む。樹林の中に東大寺大仏殿、興福寺五重塔をはじめとした堂塔が点在するさまが見られ、東大寺大仏殿が周囲の山林と一体となって歴史的風土を創り出している。				
心で感じる景観の特性	歴史的背景	東大寺大仏殿 正式には東大寺金堂という。奈良時代の大仏殿は、治承4年（1180）の平重衡などの南都焼討によって焼失している。建久6年（1195）の再建時の落慶法要には源頼朝なども列席した。永禄10年（1567）の三好・松永の戦いによって再度焼失したが、公慶上人の尽力や徳川綱吉の寄進などにより、宝永6年（1709）に落慶した。これが現在の大仏殿であり、現在でも世界最大級の木造建築である。 奈良奥山ドライブウェイ 昭和30年（1955）10月22日に供用開始された一般自動車道。若草山側は新若草山自動車道、高円山側は高円山ドライブウェイとも呼ばれ、かつては万葉ドライブウェイとも呼ばれていた。				
	民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	東大寺大仏殿 「平家物語」では、治承4年（1181）の平重衡などの南都焼討によって東大寺大仏殿が焼失した様子が描かれており、東大寺大仏殿のわが国の歴史のなかでの重要性を物語る。 「大仏殿の二階の上には千余人のぼりあがり、敵の続くのをぼせじと、橋をばひいてけり。猛火はまさしうおしかけたり。おめきさけぶ声、焦熱・大焦熱・無間阿毘の炎の底の罪人も、これにはすぎじとぞみえし」 また、和辻哲郎は「古寺巡礼」のなかで以下のように記している。 「大仏殿の屋根は空と同じ蒼い色で、ただこころもち錆がある。それが朧ろに、空に融け入るように、ふうわりと浮かんでいる。その両端の鴟尾のほのかに、実にほのかに、淡い金色を放っているのが、拝みたいほどありがたく感じられた。」 奈良奥山ドライブウェイからの東大寺大仏殿への眺望 写真家入江泰吉が「最も愛し、こだわりのつづけた風景のひとつ」である。「古都展望」「秋行く境内」などの作品がある。「秋行く境内」について、入江は以下のように解説を加えている。 「(前略) 小春日和のやわらかな日差しをうけた柿やすすきのある田圃も、大仏殿周辺の荘重な景観に溶け込み、奈良ならではのおおらかな情緒にうち満ちていた。」 (入江泰吉「作品解説」)  「秋行く境内」（入江泰吉「入江泰吉写真全集」（1981）より）				
	眺望景観の構成要素の関係	—				
	情報としての景観の特性	名所案内記 絵 図 等	東大寺大仏殿 「大和国細見図」（享保20年（1735））、「大和名所図会巻ノ一」（寛政3年（1791））、「いんばんや絵図」（明治3～15年（1870～1882））、「奈良名勝案内図」（大正14年（1925））など、近世以来多くの名所案内記で紹介されている。			
	インベントリー	東大寺 世界遺産として多くの人々に知られており、南都七大寺のひとつでもある。また、奈良は、「わたしの旅100選」や「日本遺産・百選」「新日本観光地百選」などに選定されており、東大寺はその多くで構成要素のひとつとしてあげられる。				
			守 る た め の 視 点		東大寺大仏殿は、国宝として保護されているため、視対象については、新たな保全施策は求められない。また、視対象の前景・背景の樹林が広がる区域についても、歴史的風土特別保存地区、第一種風致地区、名勝奈良公園、史跡東大寺旧境内等として保存が図られているため、新たな保全施策は求められない。ただし、視対象への眺望の前景や背景に映りこむ高さ・規模の建造物等の建設は行わないこと、また、都市公園施設の整備等の際は、形態・意匠等に十分に配慮することが求められる。 (施策の方向性) C-1	
			整 え る た め の 視 点		眺望景観を阻害しているものはみられないため、特段の再生施策は求められない。 (施策の方向性) —	
			活 か す た め の 視 点		公募により推薦された眺望景観である。また、入江泰吉の写真でも有名であり、冊子「奈良市の都市計画2005」など様々な場面で使用される眺望のひとつであり、多くの人に知られているといえる。しかし、視点場及びアクセス道の整備が十分ではなく、多くの人が気軽に眺望を楽しむ状況にはないため、視点場及びアクセス道の整備が求められる。 (施策の方向性) K-1, L-1	

法的 位置 付け

